

輝け 商店街

松山市・3

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

『坂の上の雲』が まちづくりの理念

松山市がまちづくりの土台に据えるのは『坂の上の雲』である。

「坂の上の雲」は四〇歳代の司馬遼太郎が、渾身の力を注いで産経新聞に連載した長編小説で、昭和四三年四月から四七年八月までの二二九六回にわたる。正岡子規と級友で親友だった秋山真之と、その実兄の好古の物語である。

この中で、明治という近代日本の夜明けに登場する、三人の若者の意気ごみと明るさが描かれ、今もそれは、まばゆいほど光り輝い

ている。

彼らは貧しかった。だが、その環境をものともせず、いつも高い志に燃えていた。よく学び、しっかりと前を見つめて理想を目標し、なにもものにも屈しない意志の強さがあった。

文学の子規、海軍の真之、 騎兵の好古

子規は俳人・文学者で、その大きな足跡は語るまでもない。

秋山真之は、家禄一〇石の松山藩士の子として生まれ、子規とは勝山学校から同窓。

兄の好古の招きで上京し、東京大学予備門に合格するが、学資を親に頼らないため、海軍兵学校に入學し、首席で卒業する。

海軍の戦術のエキスパートとなり、日本海海戦でロシア艦隊を撃沈し、そのときの電文「本日天気晴朗なれども浪高し」は有名。後に海軍中将となる。

好古は、藩校の明教館・養成舎に入るが、幕政が崩壊し、藩士は貧乏暮らし。銭湯の風呂たきをし

ながら勉学に励む。大阪に出て教員となり、名古屋師範付属小学校に勤務するが、陸軍士官学校に入る。陸軍大学校か

らフランスに留学し、日本の騎兵集団を育て、日露戦争を勝利に導く。陸軍大将となったあと、郷里松山の北予中学校の校長となる。

明治の指導者に学ぶ

作品に描き出されているのは、第一に若さと明るさと大らかさ、第二に幅広い知識と情報の集積、第三に時代を見通した合理主義、第四には人のつながりを大事にし、お互いが励まし合って交流を重ね、共に困難に立ち向かう、そこに培われた人づくりの大事さである。

近代日本を築いた指導者たちは、青い空に輝く雲を目ざして坂を登った。彼らには、歴史の進歩への確信と重い責任の自覚があった。それらは、閉塞感がただよう今の日本にとって必要なものであり、これからのまちづくりにも、欠くことのできないものだ。

まちづくりの核

「坂の上の雲ミュージアム」

松山市内には『坂の上の雲』の足跡や、その頃の文化遺跡が数多く残されている。

松山のまちづくりは、それらを活かしながら、街全体を「屋根の

ない博物館」と位置づけている。平成一九年四月、その中核として「坂の上の雲ミュージアム」が建てられた。

城山公園と市街地の境界部分に位置し、漱石が下宿し、子規も一緒に過ごした愚陀仏庵や、大正のロマンあふれる萬翠荘などが間近にある絶好の場所だ。

建物は二つの三角形を重ね合わせたような姿で、地下一階、地上四階、延床面積三二二二平方メートル。江戸時代に造られた庭池を生かし、通りから見える城山の緑をさえぎらないような構造となっている。ミュージアムは『坂の上の雲』の主人公やその時代背景や生き方などを紹介する。



坂の上の雲ミュージアム (パンフレットから転載)

設計者の安藤忠雄氏は、「歴史と共に回遊しながら、明治の精神を感じ、一人ひとりが思索することのできる空間」を目ざした。

展示室は、ゆるやかな傾斜の廻廊でつながれ、来館者は展示された物語の各面を見ながら、回遊式庭園を楽しむように、そのスロープを上って行く。小説の一節を、光り文字で浮き上がらせるシンボル展示がユニークだ。

戦争は民族の痴呆化

司馬遼太郎の作品が、日露戦争の当時を舞台にしていることから、戦争を謳歌するとの批判も聞く。

しかし、司馬は決して戦争を肯定してはいない。

昭和四四年一〇月、第二巻のあとがきでこう言っている。

「むしろ、勝利を絶対化し、日本軍の神秘的な強さを信仰するようになり、その部分において民族的に痴呆化した。日露戦争を境として、日本人の国民的理性が大きく後退し、狂騒の昭和期に入る」
「やがて、国家と国民が狂いだし、太平洋戦争をやったのけて敗北するのは、日露戦争後、わずか四〇年の後のことである。」

敗戦が、国民に理性をあたえ、勝利が国民を狂気にするとすれば、長い民族の歴史からすれば、戦争の勝敗などというものは、まことに不思議なものである」
このように、冷静に戦争の本質を語りかけているのだ。

よく考える館

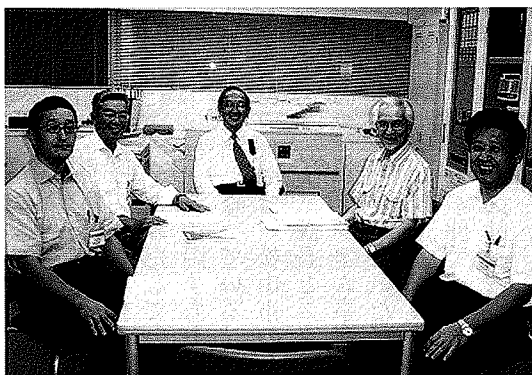
坂の上の雲ミュージアムを設置した目的について、松原正毅館長は「司馬作品に耳を傾ける。未来に向けて果敢に進む思索を深める道を開く」と言い、「よく考える館」を標榜している。

司馬遼太郎のエッセイ「二世紀に生きる君たちへ」が、六年生国語の教科書（大坂書籍）に出ている。

その中で、人間は自然によって生かされてきたのであり、自然を怖れてはならない。人間とは自然の一部にすぎない。人間には「優しさ」や「いたわり」が必要だと説いている。そして「頼もしさ」を持った人格に魅力を感じるべきだとも言っている。

六五歳のときに、この文章を書いた。小学生への教訓であるとともに、大人も考えさせられる内容

だ。原稿には、色鉛筆で訂正したあとがあり、作者の人間性に触れる思いがする。
こうした司馬精神が、ミュージアムの随所にあふれている。



坂の上の雲ミュージアムでの研究会

子規の美育は専門店の理想

今回の松山市の取材で、いろいろなことを知った。その一部を書き添えておきたい。

正岡子規は、教育論「病床譚語（せんご）」の中で、美育の必要性をあげている。

教育には知育、体育などいろいろあるが、美育は美的感情を発達

させる。人間に「美の心なければ一生を不愉快に送る」。

山水花鳥の美を感じる人は、「貧苦困頓の間にありても富貴榮華の樂を得べし」とし、美の心は「間接には慈悲性を起こし残酷性を斥（しりぞ）く」と述べている（倉田三郎・尾道大学副学長「子規の教育論に思う」）。

商店街には美心が必要である。店舗を飾り、商品構成に美の感覚を活かすことは言うまでもない。さらに深く、日専連の創始者たちの活動の理念には慈悲があった。商売を通じて暮らしよい明るい社会をつくることを眼目としていた。その根底には、人びとに尽くす隣人愛と慈悲の心が輝いていた。子規と日専連が目ざすものとは、共通の理念を見いだすことができる。

死を前に勇猛の悟り

「禅坊主の悟りは、あしにはわからん。念仏の坊主の欣求浄土ということもあしには無縁のものじゃ。すきな宗祖といえはそりゃ日蓮ぞや。日蓮のあのかつとのほせているところがあしは好きぞな」

司馬遼太郎は、子規のことばと

してこう書いている。

ミュージアムで見た色紙には、「勇猛心」の横に、「臥病十年かまきりのごとき腕に筆を握りて」と書き、カマキリを薄緑に描いている。これを和田不可得に贈っている。

子規門下の歌人で、高野山の官庁で高野山大学の名誉教授である。



「臥病十年かまきり」の「勇猛心」と腕に筆を握りて子規

法華経の方便品第二に「勇猛精進」の語がある。子規は法華経を知っていたのだろう。

「痰一斗へちまの水も間にあわず」と死の直前に詠む。胆のすわった生きざまから、法華経を心に刻む、ふっきた一面がみてとれる。虚子は「子規逝くや十七日の月明に」と口ずさんだ。司馬はこう書いている。

秋山真之が子規の葬式に姿を見せた。「升(のぼ)さん、人はみな死ぬのだ」おれもいずれば死ぬ、ということをつぶやいた。真之にすれば、それが、かれへの念仏のつもりだった。

日専連の創始者も法華経の信者であった。子規の姿と合わせ考え、共通する信への認識を感じさせられた。

野球王国愛媛の元祖は子規

愛媛県は夏の甲子園で五校が全国制覇し、代表校通算の勝利率も全国一位の野球王国だ。その源をさぐると正岡子規にたどりつく。

子規は野球ファンで、打者、走者、四球、直球などの用語翻訳やルール解説にも取り組んだ。

明治二二年、松山に帰省して河東碧梧桐など、尋常中学の生徒に野球を教えた。それが、愛媛の野球伝来の源となった。

スポーツでまちおこし

松山市のスポーツ熱心には定評がある。地域再生マネジャー制度「スポーツが『ひと』と『まち』を元気にする」事業が始まった。

企業や市民の人材の連携を強め、松山ならではのスポーツ交流メニュー(商品)の開発を進め、地域全体の活性化を図る。

特定非営利法人MIPPスポーツ・プロジェクトの理事長倉石平(早稲田大学スポーツ科学学術院准教授)が、スポーツを通じた地域振興策を検討している。

平成一八年度には、地域の人材が主体的に取り組み「スポーツコンシエルジュ」プロジェクトを立ち上げ、既存のスポーツ団体と連携して一元化を図り、松山市のスポーツや健康に関する情報発信など、具体化に向けて進みだしている。

スポーツは、松山のまちおこしにも大きな力となっている。

今回の取材では、松山市の企画調整課の矢野大二課長とスタッフ、坂の上の雲ミュージアム事務所の河本直人所長と、案内いただいた石丸耕一主査、伊予鉄道の毛利健司係長、伊賀上泰伸氏、まちづくり松山の日野二郎社長、森忠士執行役員、日専連えひめの田中邦夫社長、日専連平松泰三前理事長のみなさんから、詳細な説明や貴重な資料をいただいた。

心からお礼を申し上げます。

—松山市・終わり—